

◆司会

それでは、ただいまから市長定例記者会見を始めさせていただきます。本日の発表案件は2件になります。市長、よろしくお願いいたします。

◆市長

はい、わかりました。よろしくお願いいたします。今日の発表項目は2件ですが、その前に、お手元に『しずトクキャンペーン』のチラシが配付されていると思いますが、緊急事態宣言の解除から10日余りが経過いたしました。昨日の時点で、人口10万人当たりの1週間の新型コロナの新規感染者は1.60人と低い水準にとどまっております。8月のピークのときには100人を超えていましたので、感染予防に対して、報道機関の皆様方はもちろんのこと、市民の皆さんのご協力の賜物だと改めて感謝申し上げます。ありがとうございます。

2つのLifeを守るということが私どもの指針でありますので、徐々に“くらし”を取り戻す経済回復のための施策も打ってまいります。その第1弾がこのチラシであります。これは、昨年度、広報課が中心になって『静岡市はいいねえ。スタンプラリー』というキャンペーンを行い、とても好評だったものを受けて、それをバージョンアップしたものであります。いわゆるマイクロツーリズムの促進と、この地域内の交流人口を促すというような目的でやったわけですが、当時、その中心にいた広報課の職員が観光交流文化局の観光・MICE推進課長になりましたので、予算を大幅にアップして、そして、このような『静岡市はいいねえ。しずトクキャンペーン』という名前に変えて、今回、満を持してやったものです。本来、夏休みの期間中にやるつもりだったのですが、宣言下になってしまい、中止を余儀なくされたので、この秋の行楽シーズンに向けて、これを1つの経済対策として打ち出していくものであります。

この内容につきましては、静岡県民の方を対象に、静岡市内にお泊りの方々に抽選で特産品が当たるスタンプラリー『泊まっておトクラリー』と、清水港のまぐろ丼が付いた周遊キップなどが割引となる『遊んでおトク割引キャンペーン』の2本立てで構成されております。来年の1月10日までの実施期間でありますので、多くの県民の皆様にご利用いただきたいということ呼び掛けさせていただきます。まずは周知していかなければなりません。報道機関の皆様にもPRをぜひお願い申し上げます。

それでは、今日の話の1つ目、「第1回静岡市SDGsユースサミット」についてお伝えいたします。

若者の皆さんの笑顔があふれるこのチラシをご覧ください。とても笑顔が印象的ないいチラシを作っていただいたなというふうに思っています。ご存じのとおり静岡市は、国に認証されたSDGs未来都市、あるいは、国連に登録しているSDGsのハブ都市で

あります。まずは市民の皆さんにSDGsを認知してもらうという目的で、3年前より、1月の時期にSDGsの関連事業、啓発イベントを集中的に行うSDGsウィーク、2年目はSDGsマンス、月間。そして、今年はさらにSDGsシーズンと、啓発キャンペーン、認知度を高めるキャンペーンを拡充してきました。そのおかげさまで、SDGsの市民認知度は全国平均よりもおよそ20%高い60%に達しております。認知、理解、そして、行動というフェーズに移ってきて、また、国連も昨年より、これからゴールの2030年に向けて行動の10年にしようということでもありますので、そこに私どもは連動していきたいというふうに思っています。

そのウィーク、マンス、シーズン、いろんな啓発イベントをやったのですが、目玉は、例えば、東京ガールズコレクションだったのですね。目標5「ジェンダー・イクオリティ」に沿ってやったわけですが、残念ながらこれについては来年の1月は中止ということになってしまいました。しかしながら、若者に対する啓発、そして、行動を促す仕掛け という意味で、コロナ禍の中でありまして、今年度の目玉の事業として位置付けたのが、このユースサミットであります。

このサミットの開催には大きな目的があります。それは、2030年も地域社会で活躍が期待される若者たちのネットワークをつくり出す仕掛けになるということでもあります。目標17は「パートナーシップで実現しよう」ということでもあります。それぞれ20歳前後の方々、高等教育機関、大学であるとか、専門学校であるとか、高校生であるとか、それぞれ所属する学校は違いますけれども、それを越えた「SDGsについて何か行動していこう」という若者たちをネットワーク化するという仕掛けを作っていこう。これは例えば大学間連携にもつながっていきますし、また、静岡に進学する魅力の一つにもなっていくと、若者の流出を抑制するという効果も期待しております。

私はSDGsを、市民、企業、団体など多くの皆さんと持続可能なまちづくりにオール静岡で取り組むための共通言語だと認識しております。この認識を具現化するネットワークの一つが、本サミットの出席者と、ハイブリッドで行いますので日本平ホテルに来るパネリストの皆さんと、オンラインで参加してくださる視聴者から生まれることを期待しております。すでに、サミットに出席する若者からは「この出会いをその時だけのものにしたくない」というふうに強く決意を述べてくれておりますし、また、このチラシをご覧になった方は「私にも何かできるのではないか」というふうに手を挙げていただいたりしておりますし、今回、第1回でありますので、ここに集う若者たちが、個々の集まりを一つ大きなSDGs推進の力、また「パートナーシップで実現しよう」という目標に沿った下支えを、私ども静岡市行政ができればいいというふうに願っております。

また、サミットを開催する前には、今月16日の土曜日ではありますが、10時半から出席者同士のオンライン交流会を開催するとともに、サミットが終わった後もSDGsの課外授業をはじめ、出席者と視聴者が一堂に集まってSDGsの未来について語り合う

機会も、つまり、アフターフォローも私ども行政はしていくつもりであります。

また、これは国連の世界都市デーとも連動した事業であります。ご存じでしょうか。国連では、都市の持続的な開発を目的に毎年 10 月 31 日を「世界都市デー」と名付けて、都市問題について持ち回りで国際会議を開いております。これも残念ながら今年はコロナ禍で一堂に集まる機会はないのでありますけれども、その関連イベントが世界中で行われるわけでありまして。国連のホームページにアクセスしていただければうれしいのですけれども、この第 1 回、日本の静岡で開かれるユースサミットも、この国連の世界都市デーの関連イベントとして、国連のホームページで紹介されております。他には、ヨーロッパではスペインのマドリードであるとか、あるいは、アジアではインドのニューデリーなどの都市も世界都市デーでシンポジウムやフォーラム等を計画しているということで、それとともに静岡市のこの事業も紹介されております。

これは第 1 回でありますので、今後も持続可能なサミットにしていきたいというふうに思っておりますが、まさに若者の SDGs の取り組みの頂上として、SDGs のゴールである 2030 年の社会に活躍が期待される学生や若い社会人の方々、SDGs を自分ごとと捉えた取り組みについて考え、議論し、持続可能な社会の構築に向けたメッセージを、ここ静岡市からそれぞれの立場で世界に向けて発信することによって、若者たちの、次代を担う皆さんの SDGs の行動を促していきたいと思っております。

このコーディネーターは、皆さん、SBS の『オレンジ』でおなじみの小沼みのりさんをお願いして、上手に若者のそれぞれの主張を引き出してもらいたいなというふうに思っております。報道機関の皆さまには、事前の周知や当日の取材など、よろしくお願いいたします。

次の話題は、認知症支援の活動拠点、「静岡市認知症ケア推進センターかけこまち七間町」の開設 1 周年であります。これも 1 周年の記念イベントを啓発するチラシが配付資料の中に入っていると思いますので、ご覧ください。同じくこれ衆議院選挙の投開票日にもなります。これも 10 月 31 日でオープン 1 周年を迎えることになりました。皆さんご存じのとおり、地域包括ケアシステムの一翼を担う大事な施設であります。地域包括ケアシステムとは、ご高齢の皆さんが住み慣れた地域で自分らしく長い間ずっと暮らせるよう、医療、介護、住まいなどを一体的に整備する仕組みであり、基礎自治体を中心に構築しようというもので、これ国策でもあります。在宅でも、ずっと自宅にいても元気に暮らせる仕組みづくりであります。これを私どもも「静岡型地域包括ケアシステム」という名前で進めているわけですが、イメージは富士山です。介護を必要とする方々と、フレイルの状態にある支援を必要とする方々、裾野には多くの元気な高齢者の皆さん、そういう皆さんのレベル別に地域で暮らせる仕組みづくりをしようということです。包括的にはそういう大きな全体像なのですけれども、私ども静岡型は特に、認知症の高齢者が静岡市内で約 2 万 5,000 人いらっしゃるという推計されていますから、その方々、また、その認知症の方を家族に持つ方々の負担というものが大変大きいもので、介護を

理由に離職したりする、そんなケースが静岡市役所の中でもあるぐらいですので、そういった方々の負担を軽減するという目的もあって、本人やそのご家族に対する支援と、全ての世代に向けた認知症の理解促進を図る認知症支援の活動拠点として、昨年10月31日に葵区の七間町に設置いたしました。「かけこまち」というのは駆け込み寺という意味合いがあるわけですが、どなたも簡単にアクセスできる場所にこういうものはあるべきだということで市内一等地の七間町にあえて設置したのは、非常に全国的にもユニークな例であります。今や認知症は誰もが発症する可能性があります。また、介護されるご家族は大きな負担を抱えることとなります。認知症にかかる不安や負担を抱える全ての方々に寄り添い支援するとともに、広く市民の皆さんに認知症への理解の促進が図れるような活動を取り組み続けるつもりであります。

さて、この「かけこまち」でありますけれども、3名の方が常駐しております。医療・介護の専門職や認知症の支援員の方が常駐しておりますけれども、センターに来てくださいますと、医療や介護に関する専門的な相談に乗らせていただくのみならず、その本人の様子、ご家族の様子においては、さらにそこから専門機関を紹介して、そこに繋がって役割も持っております。タブレット端末を活用して、オンラインで専門機関と「かけこまち」をつないでリモートで即時に相談する体制も整えております。今年度からはさらに、ご高齢の方だけではなくて、64歳未満のいわゆる若年性認知症といわれる方々と、その家族の方々に就労や生活支援などについて専門のコーディネーターが相談に乗る体制も整えております。ぜひ多くの方々にセンターに訪れていただく、買い物帰りにふらっと寄っていただければ、健康診断を受けるような感覚で、脳健康チェック、体の機能チェック等のゲーム感覚のソフトも用意されておりますし、このチラシにも掲げておりますが、なるべく親しみやすい、今、話題のeスポーツ、これは、手先を動かすことによって認知症の予防になるということでもありますし、そんな教室をやったり、あるいは、お茶の効能を学ぶ講座をやったり、楽しみながら認知症予防に取り組んでいただく工夫をしていくつもりであります。開設1周年を迎え、改めてこのセンターの知名度を上げていきたいというふうに思っておりますので、この10月30日の土曜日から11月9日までの10日間に、さまざまなイベントを「認知症の未来を皆で考えるウイーク」と銘打って集中開催いたします。内容はここに書いてあるとおりであります。ぜひこれも事前周知していきたいと思っておりますので、記者の皆さんにはご協力いただきますよう、選挙で忙しい中、恐縮ですが、ぜひご紹介いただければ大変ありがたいなと思っております。今日の私の話題は以上です。よろしくお願いいたします。

◆司会

それでは、ただ今の発表につきまして皆さまからご質問をお受けしたいと思います。いかがでしょうか。読売新聞さん、お願いいたします。

◆読売新聞

読売新聞社です。すいません、聞き漏らしたかもしれませんが、ユースサミットで静岡市の職員の方が登壇されるのですけれど、これはどういうお立場の方でしたっけ。説明されましたか。

◆市長

パネリストの一人です。ちょっと実務的に補足してもらいますけれども、学生の皆さんには1つロールモデルにはなってほしいし、また、本人にとってもSDGsの担当として、今、頑張っているのです、そんな取り組みを紹介する、いわゆる公民連携という一環で一人の女性職員を抜擢したというふうに報告来ておりますけれども、少し補足をお願いいたします。

◆企画課移住・事業推進担当課長

企画課の担当、移住・事業推進係の担当課長をしております平尾と申します。よろしくお願いたします。職員につきましては、以前にTGCしずおかのイベントを計画というか、立案したようなことがある職員で、その時の知見を使って今回の会議の中でロールモデルとしての立場を取って回答して、対応していただくという形で考えております。以上でございます。

◆読売新聞

これ、今、現在SDGsを担当されている方という…

◆企画課移住・事業推進担当課長

現在は担当しておりません。

◆市長

現在はそれこそ地域包括ケア本部にいますね。ただ、プロジェクトチームに今まで参加していて、大変意欲的にSDGsの取り組みを課外活動でもしてくれているのかな。

◆企画課移住・事業推進担当課長

そうです。

◆市長

そんなことで今回やってもらおうということになったのですね。

◆読売新聞

ありがとうございます。

◆司会

それでは、その他いかがでしょうか。では、毎日新聞さんお願いいたします。

◆毎日新聞

毎日新聞です。よろしくお願いいたします。認知症に関してですが、このケア推進センターができてから1周年ということで、もしお分かりになれば、どれくらいの、1周年の間に利用者の方が来られたのかということと、先ほど、約2万5,000人というのは、これは、ちょっと確認させていただきたいのですけれど、潜在的なそういう認知症になっている可能性のある方という数字で間違いないかということと、もし分かれば、市内で実際に認知症として認定されている方が何人いらっしゃるかを教えていただければと思います。

◆市長

そうですね。これは数字に関することですので、また実務的に答えてもらいますが、意外と多いのですよ。高齢者の9人に1人が認知症というふうにもいわれております。人口の約12%ですね。そう考えると、私が報告を受けている範囲では、今年の3月末時点で約2万5,000人だということで先ほど数字を発表させていただきました。この1年間、コロナ禍の真っ最中での開設でありましたし、また、この間、高齢の皆さんはやはり外出自粛と、うつらない、うつさせないということでなかなか外に出る機会がなかったので、この1年間は思うような活動ができていなかったというところが正直なところですので、あえて私が今日1周年を機会にこの定例記者会見の話題にして、もう一度報道機関の皆様にも注目していただきたいということで、今日この発表をさせていただきましたが、このような機会ですので、ぜひPRをよろしくお願いいたします。

◆地域包括ケア推進本部次長

ご質問ありがとうございます。地域包括ケア推進本部次長の村松でございます。よろしくお願いいたします。来場者の数ということでございますけれども、年度で、すいません、切らせていただきますと、昨年10月31日に開設いたしまして、まず、3月末までの段階で600人弱が利用されました。月平均でならしますと120名程度でした。やはりなかなか認知度が低いということがございましたので、今年度に入りまして、コロナ禍でなかなか難しい中ではあったのですけれども、講座をいろいろと積極的に開設させていただいた中で、7月までの4カ月間になるのですけれども、700人弱のご利用をいただいております。これ、月平均になりますと170人ということで、昨年

度に比べますと平均で 50 人程度増えているというような状況でございます。ただ、市長も申しあげましたけれども、これを機にさらに認知度を上げたいというところで、今回集中的にウイークと銘打って講座等をさせていただくというところでございます。

◆市長

次長から概説的に説明してもらいましたが、実はこれはもう数年来取り組んでいる1つの取り組みでありまして、その仕掛け人は、看護師の立場で木下さん、今日こんな質問もあろうかと思って来てもらっておりますので、ちょっとマイクを渡していただきたいのですけれども、彼女がこの制度設計の仕掛け人であります。実は今年の3月に退職したのですが、もう少し残ってこれをやりたいということで、今、再任用の主任看護師として活躍してもらっていますが、その辺りの1年間の総括と今後の課題について、ぜひ一言お願いいたします。

◆木下

はい。地域包括ケア推進本部の木下と申します。昨年10月31日に開設しましたけれども、それまでには様々な検討をしてまいりました。認知症の予防ということができるとかどうか。または、エビデンスというのがあるのかどうかということも考えてまいりまして、でも、やはり、もう今後、高齢化とともに、認知症の方、避けて通ることができない、誰もが、もしかしたら自分も認知症になるかもしれない。でも、認知症になっても地域で支えてもらえる。または、ここがあるから安心していられる、そういう場所をできれば作りたいということで、その皆さんの思いを込めて、昨年、開設したところです。

まだまだ地域の中では認知症に対しての偏見があったり、怖い、不安だということで、口にも出せない、病院にもかからないという方たちが大勢いらっしゃいます。それで遅れて重度化して、自分のやりたいことができない、自分らしい生活ができないということになってしまわないように、そういう方たちが多くいらっしゃいますので、それを早く見つけ出して適切なところにつないであげる。そして、早く、もしかしたら改善できるかもしれない、そういう段階のときに見つけてあげるというような、適切な相談に対応できるという場所として七間町にオープンさせていただきました。ぜひ多くの皆さんにご利用していただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

◆市長

はい、どうもありがとうございました。本当に熱意を持って、この、認知症は静岡市がなんとか下支えするぞという意欲で開設したものだということをぜひご理解いただきたいと思っております。記者のご指摘のとおり、認知症というのはまだまだ解明しきれないところがたくさんあります。研究の途上であります。ただ、そうであるけれども我々は

ここにアプローチしていこうということ。ですから、この研究面でも我々はかなり高いレベルでそういう専門機関とつながって、最新の知見を生かしてここで実践していこうという、非常に全国的にも、この一等地にこういうセンターを、認知症ということだけでの取り組みになるのは非常にユニークな事例であり、また、先進的な事例だというふうに評価もいただいております。

ただ、コロナ禍で思ったほどなかなか高齢の方々にご利用いただけない現状がありますので、これ、2年目に私は期待したいと思います。ちなみに、文藝春秋社に私の大学の同期とか同級生がいて、今度、彼が独立してアルツハイマーの特効薬についてノンフィクションを書いて、ずいぶん売れているそうなのです。

彼もその本の中で言っていますけれども、本当に長い間努力して努力をして創薬というのできるわけで、そう簡単に認知症、また、その一形態のアルツハイマーというのが治療できないという現状ですので、ただ、家族をはじめとした当事者の苦しみというのは、もう待っていただけませんので、我々としてできることを今の時点でやっっていこうという試みでありますので、そんな認識でご理解いただければありがたいなというふうに思います。

◆毎日新聞

ありがとうございました。

◆司会

その他いかがでしょうか。よろしいでしょうか。それでは幹事社質問に移りたいと思います。毎日新聞さん、よろしく願いいたします。

◆毎日新聞

はい。幹事社を務めます毎日新聞です。今回の幹事社として質問が3点ありまして、まず第1点目として、10月4日に岸田新首相による政権が発足しました。静岡市として、まず、市長として、この岸田首相に対して期待することと、あと、静岡市として政策的な要望ですとかそういうものがもしあればお願いしたいというのが、まず1つ目のお話です。

◆市長

はい。危機の時代の総理大臣ですので、やはり平時のときとは違って、このコロナ禍の中、トップとして、国家指導者として強いリーダーシップを発揮してほしいなというふうに期待しております。岸田さんはとても聞く力を持った方だと自他共に認める存在であります。私も今までも何回もお目に掛かってお話しもさせていただきました。先週も静岡市にいらっしゃいました。私たち地元静岡4区で望月義夫先生が活躍しており

ましたので、私はいろいろ国との要望のパイプ役として望月義夫先生と共にする機会が多かったのですけれども、ことあるごとに、「市長、私の夢は岸田政権を作ることなんだ、岸田さんを総理大臣にしたいんだ」ということをおっしゃっていたのを記憶しております。本人もそのことをよくよく分かっているのでしょうかね、おそらく。先週、忙しい、発足間もない、総理大臣になったのですけれども、静岡にいらっやって、龍華寺に足を伸ばしていただいて、望月義夫先生の墓前に手を合わせた。きっと、「もっちゃん、おかげさまで総理になったよ、ありがとう」と報告されたのではないかなというふうに思います。本当にそういう人間味のある、そんな総理なのだろうなというふうに思います。

また、その中で、これは私たちSDGsの考え方の中で、資本主義の行き過ぎを是正していくと、つまり、持続可能な資本主義社会を作っていかなければいけない、環境と経済を調和させていかなければいけない、この静岡市のまちづくりとも大変親和性のある考え方を持っております。ご承知のとおり、「成長と成長」じゃなくて「成長と分配」なのだというような言い方で、分配ということをととても意識した経済対策をこれから準備していこうというふうに伺っております。私もそれにも期待していきたいなというふうに思っております。成長・拡大路線から成熟・持続可能な路線に日本がこのポストコロナの時代が変わっていく、そのリーダーシップを発揮していただきたい、私の期待であり願いであります。

昨日、ちなみに全国市長会を代表して、立谷相馬市長と副会長3名で総理官邸に行って緊急要望をしましてまいりました。夕方の時間を割いてくれたのですけれども、この重点提言は、コロナの追加接種、今日の新聞にも少し載っていましたが、抗体がそんなに長持ちしないという研究結果もあるようで、8カ月過ぎということではなく、もう少し前倒ししたほうがいいのではないかと提言をしました。私どもとすると、「年内に3回目ができる自治体は実施するべきだ。国はそのことについて支援してほしい」というようなことを申し上げたのですけれども、総理は、「それにしっかり対応する」なんていうことをおっしゃっていました。あと、経済対策の実施、国土強靱化、そして、学校教育のICT化の推進、この4点を全国市長会として、昨日、重点提言をしましてまいりました。関心のある方は、また、これ、ぜひ配付していただければなと思います。以上です。

◆毎日新聞

ありがとうございます。2点目として、今、参院補選がまさに選挙を実施しているところだと思うのですけれども、この参院補選、衆院選を占う前哨戦ともいわれています。これに対する市長のお考えと、どういう影響があるかなど、ちょっとお願いいたします。

◆市長

はい。まずは行政の長として申し上げたいのは、前代未聞の2週続けての国政選挙ですので、選挙管理委員会のほうには、とにかく準備作業、大変な量であるけれども、正確に、迅速に、選挙実務、あるいは当日の投開票事務をするということを第一に従事してほしいということを申し上げております。

◆毎日新聞

3点目の質問に行かせていただきます。まず、緊急事態宣言が明けて、普通どおりの日常を取り戻そうとしていますけれど、このタイミングでの解除についての、市長がどう思われているかということと、今後、経済と感染防止という両立をどのように果たしていくかということをお話してください。

◆市長

そうですね、自治体の長としても、感染拡大防止と社会経済活動の再開というバランスをどう取っていくかというのは、ときどきの状況に応じて決断しなければいけないことで、それが2つのLifeを守るということにつながるのですね。国レベルですと、やっぱり首都圏と地方ではずいぶん状況が違うし、このブレーキとアクセルの仕方というのは難しいのだろうなというふうに拝察いたします。

しかしながら、今回、国全体でも感染が少し抑制される状況が見てとれるということで、解除のタイミングは適切であったのではないかなというふうに理解しております。しかしながら、まだ油断はできません。感染拡大防止、とりわけワクチンの接種の促進ということが肝要かというふうに思っております。静岡市は今、挽回の途中でありまして、これも数字を一つ申し上げますと、昨日の段階で65%かな、そうですね、1回目の接種を終えた方が64.99%、これ、今月になって、かなり国や県との差を詰めております。国とは2.35%の差、県とは4.75%ですね。1回目で詰めていますので、これから2回目で11月7日に向けてさらに詰めて、11月7日完了時点では、県や国へと追い付くような予定が立っておりますので、それに向けてデイリーで数値を全局でチェックしているところであります。保健福祉長寿局長、それでよろしいですね。何か補足があれば、その辺りのところ。

◆保健福祉長寿局長

補足は特にはないです。

◆市長

大丈夫ですか。はい。また、昨日、緊急提言してきましたけれど、3回目の接種についても、これから関係団体と引き続き連携して、今までの経験も生かしながら混乱がない

ように計画的に進めていきたいというふうに思っております。

一方で、社会経済活動の再開ということは、秋の行楽シーズンを狙って冒頭申し上げたとおりのキャンペーンを行っていくと、これ、かなりお得なキャンペーンとして予算を作っておりますので、そこら辺の両立の具合ということが肝要かと思えます。以上です。

◆毎日新聞

ありがとうございました。

◆司会

それでは、ただ今の幹事社質問に関しまして、皆様からのご質問をお受けしたいと思います。いかがでしょうか。静岡新聞さん、お願いいたします。

◆静岡新聞

静岡新聞です。最後のお話しの関係ですけれども、3回目の接種、ワクチン接種で、計画、経験を生かして混乱のないように進めたいということでしたけれども、市長会としても年内にできる自治体については接種を支援してほしいというふうに総理のほうに要望したということですが、ワクチンの供給次第ではあるかと思うのですけれども、静岡市としては3回目の接種、例えば、可能であれば年内に始めたいであるとか、何かスケジュール的なことでお考えになっていることはありますか。

◆市長

これ、後ほど保健福祉長寿局長にも出番を作りたいと思えますけれども、私の思いとしましては、まずは国がどう判断するかですね。今まで一般的に国の方では、8か月を経過したらば3回目を打つのが適切だというような考え方だったのですけれども、思ったほど抗体が増えない方が多くて、8か月まではもたないというような事例が出てきているようです。それを受けて前倒しするかどうかというのが国の判断を待つところです。ファイザー、モデルナという二つのブランドでありますけれど、ワクチンの供給量は十分にあるということでもあります。私ども静岡市も、今の計画では、8か月後ということを受けて、来年2月に3回目の接種を開始するという事になっておりますけれども、これから国の動きを注視しながら、もし国のほうが早めてほしいという要請があったらば、それに対応するという事も、昨日提言したという立場でありますので、検討していきたいというふうに思いますが、保健福祉長寿局長、補足をお願いします。

◆保健福祉長寿局長

保健福祉長寿局長の杉山です。よろしく申し上げます。今、市長のほうからお話がありましたけれども、現在、国から示されているのは、2回目の接種から概ね8か月を経過

された方というふうなことが一つ示されています。それからすると、全国的にも医療従事者の方が先に先行接種されていますので、その方が早ければ12月ぐらいからは3回目の接種の対象になろうかなというふうに考えているところです。

また、一般市民の方、静岡で第1クールが始まって、ちょうど6月中旬から7月頭ぐらいにかけて2回目を打っていただいている、そこから見ると、早い方で2月ぐらいには8か月以上経過するという対象になろうかなというふうに思っています。概ね8か月以上というふうな情報の中で作業は進めておりますけれども、今後、国の方からもさらに情報が出てくるでしょう。そういうものを踏まえながら計画をしっかりと立てて対応していきたいというふうに考えています。

◆市長

はい、どうもありがとうございます。静岡市の考え方は今、局長がおっしゃったとおりです。余談ながら、昨日、全国市長会の会長が病院経営者でありお医者さんなのです。だから、そういう立場から、「総理、これは3回目年内にやったほうがいいですよ。12月ぐらいからやったほうがいいですよ」と迫ったのですが、総理、明言は避けました。あくまでも検討していくというような答えだったということをつけ加えておきます。

◆司会

はい、その他いかがでしょうか。幹事社質問に関連してのご質問いかがでしょうか。先に中日新聞さん、お願いいたします。

◆中日新聞

中日新聞です。コロナの感染拡大に関連してですが、第5波がだいぶ落ち着いてきて、でも、第5波で医療がだいぶ逼迫したり、保健所業務が逼迫したと思うのですが、その第5波の反省点というか教訓と、今、感染が落ち着いているからこそ、やるべき対策というか、片一方で経済対策という話がいろいろあったと思うのですが、その上で、今できる対策みたいなことを伺えればと思います。

◆市長

はい。それも保健福祉長寿局長から実務的に現状についてコメントさせていただきますが、記者が本当に最前線で頑張っている保健所の職員のことを慮ってくれて、いろいろ春風を送ってくださっていることに、いつもいつも私はありがたいなと思っております。とにかくやっぱりマンパワーをもう少し上げていかなきゃいかんと、マンパワーというのも、量的な拡大もあるし、質的な向上もあると、その司令塔として、1つ即戦力として、今回、保健所の所長を募って、そして、田中先生に10月1日から静岡保健所の所長に就任してもらいました。

そういうことを順次しながら、やっぱり最前線で頑張っている方々のマンパワーを下支えしてきたいなというふうに思っています。お願いします。

◆保健福祉長寿局長

保健福祉長寿局長の杉山です。お願いします。第5波でございます。急速な患者発生に伴って、病院、あるいは、重症の患者さんがなかなか病院のほうで入れないというふうな状況もありました。しかし、医療機関、医師会のほうのご協力をいただいて、しっかり対応ができた状況にあったかなと思います。しかし、保健所のほうの業務も逼迫したという状況もございます。それらを踏まえ、次の第6波、来ない方がいいのですけれども、第6波を想定したような状況の中でも対応できる体制、今、市長がおっしゃっていたように、人的な確保、あるいは、例えば医療機関、あるいは他の機関といいますか、在宅でやっている看護師さんとか保健師さんの活用だとか、いろいろな社会資源も総動員するような形で、この下支えするようなところも検討していくということをしていかないと、しっかりした反省を生かしていくことができないかなというふうに思っております。その辺の制度構築を目指していきたいというふうに思っています。

市民の皆さん、今回もしっかり、マスク、手指消毒すると、密を避けるという基本的な行動を徹底していただいたというところも大変感謝するところでございますので、今、ちょっと落ち着いていますけれども、引き続き感染予防対策のご協力についてはお願いしたいというふうに思っています。よろしくお願いします。

◆司会

はい、その他いかがでしょうか。SBSさん、お願いいたします。

◆SBS

SBSです。お願いします。こちらの『しずトクキャンペーン』ですけれども、県内の県民限定ということですが、県内での経済活動、宿泊などの遊びに関しては「どうぞ、してください」というメッセージとして受け取ってよろしいでしょうか。

◆市長

おっしゃるとおりです。感染対策には気を付けながらですよ、気を付けながら、しかし、「家族の思い出を作ってください、友人との思い出を作ってください」ということで、また、経済を動かしていきたいという意図があります。せつかくのPRの機会ですので、課長かな、仕掛け人、広報課の頃から一生懸命やってくれていますので、ぜひ、質問いただいたので、次長、どうぞ。

◆観光交流文化局次長

観光交流文化局次長です。よろしくお願いします。今、市長がおっしゃっていただいたように、これから、今まで抑えていた気持ちを、なるべくこれに乗って行っていただくということ、やはり注意していただいて、その上でということはどうしてもお願いしたいところなのですが、そういったことで、今、困っている観光業者等の助けになりたいというようなことで行いたいと思いますので、ぜひ皆さん、PRをお願いいたします。とてもお得なものになりますので、よろしくお願いします。以上です。

◆SBS

市長としては、急な人的な動きが出てしまうこと、そのリバウンドなどの懸念などは現時点では特には考えていないのでしょうか。

◆市長

もちろんあります。もちろんありますので、感染対策は施した上でこのキャンペーンを活用してください、というお願いでありますけれども、やっぱり経済対策として、サービス業の皆様が非常に厳しい状態に置かれておりますので、マイクロツーリズムという限定した中でありまして、ここの交流人口を拡充することによって地域経済の活性化にも貢献できれば、という大きなバランスの下でのキャンペーンだという理解をお願いしたいと思います。

◆SBS

ありがとうございます。すいません、続けて、先ほど、参院補選の件に関しては選管への指示を「もう、しましたよ」という話でしたけれども、参院補選、国政選挙で、結果的には市の運営にも関わってくる話になってくると思います。それについては、どれだけの重みのある選挙なのかという受け止めと、また、ちょっと参院補選になると投票率が下がる傾向にもあります。それについて市民の方への呼び掛けなどありましたら、お願いします。

◆市長

そうですね、2つの点ありました。もう一度。

◆SBS

国政ではありますけれども、結果的には静岡の選挙区から出る候補者の方で静岡市への影響も多分にあると思うのですが、この参院補選の選挙の重要性と、投票率が参院補選は下がりがちなのです、例年ちょっと。それへの懸念であったり、呼び掛けの部分があればお願いいたします。

◆市長

そうですね、まず1つ目についてはおっしゃるとおりであります。静岡市にも大きな影響を与える参議院選挙です。今回、私、若林洋平さんの出陣式にも参加させていただきました。首長の代表、地方のこの厳しさということが分かっている首長の代表が参議院の1席を占めるということは、とても私たちとしては意味のあることだろうというふうに思っております。ですので、ぜひ頑張ってくださいなという気持ちであります。それからもう一つ、やっぱり投票率は上がってほしいなというふうに思います。全国的にも注目されている選挙でありますので、特に若い方々に関心を持っていただき、県の選挙管理委員会の方も啓発について頑張ってくれていて、若い方々に人気がある「みやぞん」を一つ、キャンペーンキャラクターに活用してやってくれているようですので、そんな県の選挙管理委員会とも連携しながら、投票率アップのための施策を、選挙管理委員会事務局、今、頑張ってくださいなところでもあります。

◆司会

その他いかがでしょうか。第一テレビさん、お願いいたします。

◆第一テレビ

第一テレビです。お願いいたします。先日、先ほどもおっしゃっていたように、参院補選で若林さんの出陣式に市長、立たれましたけれども、今後、静岡市内での演説、街頭などで応援演説などに立つご予定はありますか。

◆市長

今のところありません。要請があったら、その時、検討したいと思います。公務優先だということは、彼も市長だったので、理解してくれていると思います。

◆第一テレビ

はい、分かりました。もう一点、別の質問ですけれども、市議会の委員会で日本平動物園の象の導入の交渉を中断しているという報道がありました。実際、現在の状況はどうなっているのか。また、非常に交渉難航しているということですが、これは諦めたわけではないのかというのを、ちょっと聞かせていただけたらなと思います。

◆市長

決して諦めたわけではありません。ただ、これもSDGsの方向性との関係で難しい議論ですね。ご存じのとおり、動物愛護、環境保全という観点から、象あるいは希少動物の国外間の移動ということが、今のシャンティ達が来た昭和44年に比べるとかなり

厳しくなっています。ワシントン条約をはじめとした、そういう難しさがあります。最初は我々、象の従前の供給地であったタイをターゲットにして、正式ルートで小長谷副市長中心にアプローチしたわけです。政府を通じて、タイの外務省を通じて。しかし、やっぱり現地では、逆に「象を国外に移動させるな」という動物愛護団体、自然保護グループというのも、タイもかなり民主化が進んでいる中で大きな勢力になっていて、なかなか簡単ではないということで、次に、ご縁もあって、タイだけではなくてミャンマーにもアプローチをしようということで、今、目下、目下でありますので、その交渉途中であります。日本平動物園も、象を入れるんだったら今までのように狭い檻の中に閉じ込めるのではなくて、なるべく自然に近い形の環境を提供するというのも担保しないとなかなか難しいのかなど。そうなるとなかなかハードルが高いなというのが現状だということをお伝えさせていただきます。子どもたちにとっては、象さんがいる動物園というのは本当に待望しているというのはよく分かるのですが、だから、そのこともぜひ、この子たちに、そうなのだけれども、環境保護という観点、そういった点で、動物を大切にするとき、動物にとってどういう環境が幸せなのかということにも思いをはせて、この問題に関心を持ってもらえればうれしいなという、少し深い報道をしていただければうれしいなと思います。

◆司会

それでは、時間も 50 分を過ぎておりますので、最後にどうしてもということで、読売新聞さん、ではよろしいですか。お願いいたします。

◆読売新聞

すいません、読売新聞社です。清水区の桜ヶ丘病院のことでちょっとお伺いしたいのですが、9月の定例会で質問が出て、市長も答弁なさってしまっていて、病院側から、建物の基本設計と、あと開院後の病院内容について説明があったということで、市長の答弁では基本的に前向きに評価されているような印象を受けたのですが、これは、病院側の基本的な考え方を市としては基本的に受け入れるということでよろしいのでしょうか。

◆市長

おっしゃるとおりです。前向きに評価しています。

◆読売新聞

ヘリポートの問題で要望されてきて、回答としてはホバリングスペースで、例えば、市が期待されていたような患者の搬送ということは原則できないのではないかと思いますけれど、それも仕方がないということなのですか。

◆市長

そうですね、そのところは私どもとＪＣＨＯさんの交渉過程の歩み寄りの結果だということなので尊重したいと思いますが、私どもは、きちっと着陸のできるヘリポートということも想定して、緊急時のヘリポートの設置というものを求めてきた、働き掛けてきたわけであります。しかし、非常に予算が増えるということのぎりぎりのところで、ホバリングができるあのような形のスペースを設置するということになった。そこも非常に私どもに寄り添ってくれた結果なのだろうなということで、尊重したいというふうに思っています。補足はいいかな、これは。大丈夫かな。はい。

◆司会

はい。それでは、以上をもちまして本日の定例記者会見を終了させていただきます。次回は10月29日の金曜日となります。本日はありがとうございました。

◆市長

ありがとうございました。